

□ ため池に抱かれて

航空写真で見ると、兵庫女子短期大学の特色が瞭然である。兵庫県は、香川県などと共に「ため池」の多い地域であり、それは特に東播磨の印南野（いなみの）台地に集中している。兵庫女子短期大学は、そのひとつ、平安時代に築造された加古川市で最大の表面積を誇る寺田池に隣接し、これを借景としてキャンパスを形成している。

加古川と明石川に挟まれた印南野台地は、両河川よりもきわだって標高が高いうえ、雨量の少ない瀬戸内気候のため、古くから農業用水の確保に苦慮してきた地域であり、奈良時代頃から水路やため池の築造が行われてきた歴史を持つ。中には聖徳太子の指揮の下に造られたとされる用水や関連史跡もあるが、実際は民衆が自らの手で地形の微妙な高低差を

活かしながら築き上げてきたものである。

ため池の歴史は、技術史や民衆の生活史と密接な関連を持っていて興味深い。近年は、減反政策の下でその本来の用途を失いつつあり、また急速な宅地開発によって消滅したり、生活排水によるドブ池となりつつある。

兵庫女子短期大学は、その名称からよく公立短期大学と誤解されるが、仏教系（真宗本願寺派）の私立短期大学である。建学の理念は聖徳太子の思想と関連があるようだが、正直なところ、私個人としてはそれをよく理解しているわけではない。しかし、聖徳太子にゆかりを持つこの地において、唯一の高等教育機関として、地域の歴史と共通する理念に基づいて、今日の時代に民衆の生活と文化の創造に寄与しようというところに、今後における兵庫女子短期大学のひとつの可能

性を見いだすことができるのではないかと思っている。

もちろん、今、地方の小さな私立短期大学が、のんびりとロマンに浸りながら将来展望を描く状況にないことは、兵庫女子短期大学においても明らかである。特に、阪神地域には多くの私立女子短期大学がひしめいており、その場末に位置しているとはいえ、否それ故に、同じ土俵での不利な競争を強いられている。

□ 生き残りをかけて

この間、取り組まれた兵庫女子短期大学の生き残り戦略は、まず第一に、従来のシステムのリストラ・合理化である。学科組織と事務体制の合理化、非常勤講師の削減、教室・施設利用の効率化等が推進されてきたが、最終的には既存学科の改組転換が目指されている。

なお、そのさいのひとつの大きな課題は、兵庫女子短期大学の特徴でもある第三部制度の問題である。第三部制度は、

全国でもわずかに九校ほどが採用している
昼間二交代・三年制の特殊な教育形態で
あり、周辺地域の紡績企業との提携のう
えに、午前中二コマ（三時間）受講して
午後八時間労働するグループと、午前中
働いて午後三時半から二コマ受講するグ
ループとが、一週間ごとにその順番を交
代しながら教育を受けている。

兵庫女子短期大学には保育科第三部
（入学定員百五十名）と生活科学科第三
部（同四十名）があるが、国内紡績産業
の空洞化により、従来の提携企業の勤労
学生が年々減少して一学年に数十名程度
になっている。すでに提携企業以外の学
生が多数入学するようになって久しい
が、二交代制がネックとなり年々定員制
れが進行しているのが実情である。

第二の戦略は、いわゆる四年制への転
換である。兵庫女子短期大学には、保育
科、初等教育学科、食物栄養学科、生活
科学科、美術デザイン学科と前述の第三
部の二学科があったが、一九九五年四月

からこれら七学科のうちのひとつを募集
停止し、四年制の「兵庫大学」を発足さ
せた。募集停止したのは「初等教育学科」
（入学定員百名）で、開設されたのは「経
済情報学部」（同百五十名）である。差
し引き五十名の定員差は、保育科（同二
百名）から五十名を充当した。

当初の計画では、これは四年制化の第
一步であつて、引き続き第二学部設置に
向けた準備が進むはずであつた。しかし、
その年の一月十七日に、思いもかけぬ阪
神淡路大震災があり、同一法人の幼稚園、
高校が甚大な被害にあつたほか、被災学
生・教職員への対応、さらに発足した兵
庫大学の初めての運営など、学園全体と
して当面の対策に振り回され、当初の将
来計画は見直しを余儀なくされることと
なつた。

ところで、同じキャンパスに兵庫大学
（男女共学で実際にはほとんどが男子学
生）が発足したことによって、これまで
の女子短大としての雰囲気は大きく変わ

り、あくまで外見上ではあるが一種の活
力が感じられるようになった。また同時
に、短期大学と大学との研究条件等の格
差の問題など新たな問題が急速に浮上し
ている。やがて、なぜか非公開の給与体
系の問題や、任期制の問題とも絡む教員
の身分保障の問題、教育研究活動とその
評価のあり方の問題など自らの足許の問
題が、学園の将来構想と重ねながら真剣
に論議されるようになる。学園の活力
は、そこで初めて外見だけではなく実質
を備えたものになるものと思われる。

□ 地域に開かれた

短期大学を目指して

改組転換と四年制化は、多くの短期大
学が目指している生き残り戦略である
が、それだけで、個々の短期大学はもち
ろん、日本の高等教育に新たな活路が切
り開かれるものでないことはいうまで
ない。

高等教育改革の基本は、受験体制に苦

しめられている日本の子どもたちを解放するものでなければならず、また就職難などの情勢の下で、理想を見失い刹那的



に流れがちな学生たちに対して、未来への確かな展望を保障するものでなければならぬ。そのためには、高等教育政策・行財政の国民本位による根本的な転換に向けた取り組みだけでなく、個々の大学の教育内容・体制を学生本位に改革する主体的努力もまた不可欠である。単なる生き残り策を越えた、より現実的かつ根元的なラディカルな戦略が求められているのである。

兵庫女子短期大学では、この間の将来計画構想において、こうした観点での改革案が論議され、特に教養教育と専門教育との関連やそのあり方に関して是他大学に引けを取らない構想が打ち出されたと自負している。ただし、その具体化のためには、当面乗り越えるべき課題が山積していることも事実であるが。

一九九三年に「附属総合科学研究所」が設立され、ささやかながら共同研究の推進・助成や地域に開かれた短期大学の窓口としての役割を果たしていること

も、積極的に評価できる側面であろう。たとえば、ため池に関する共同研究で、学園の将来ヴィジョンを組み込みながら地域計画としての寺田池再生のプログラムを描く試みがなされたり、九五年秋に、同研究所と加古川市との連携によって開設された「加古川市民生涯学習大学」で、本学で講義を持たない学長がそこでは市民対象の講義を担当するということも行なわれている。学内ディスカッションペーパーとして刊行された研究所報『VERA』も、地域への情報発信誌としての役割を果たしつつある。

地方の私立短期大学としての兵庫女子短期大学の未来展望は、この地における聖徳太子の業績に象徴される先進的事業と重ねながら、地域の課題と切り結び、地域の教育（学生募集上は特に高校）や住民との確かな信頼関係に裏打ちされた理想とロマンを追求する中でこそ、築き上げることができるであろう。

(もちつき・あきら)